

1. 学校（区）概要

- 教育目標：自ら学び、仲間とともに、志（夢）の実現を目指して挑戦する子どもの育成
- 所在地：飯塚市中730番地1
- 施設形態：施設一体型
- 児童生徒数（R3.5.1時点）



学年	小学校								中学校					小・中計
	1	2	3	4	5	6	特支	計	7	8	9	特支	計	
児童生徒数	77	78	67	80	73	83	35	493	64	74	68	8	214	707
学級数	3	3	2	2	2	3	6	21	2	2	2	2	8	29

2. 導入経緯

【検討開始のきっかけ】

本市では、「小学校から中学校入学後の学習意欲の低下」「中学校一年生で急増する不登校の問題」等、様々な教育課題を抱えていた。これらの教育課題を解決するためには、義務教育9年間を見据えた連続性と一貫性のある教育を推進し、子どもたち一人ひとりの特性に応じたきめ細やかな学習指導や生徒指導を実現することが有効だと考えた。

【具体的な経緯】

- ・平成23年度「飯塚市小中一貫教育調査研究事業」を立ち上げ、各中学校区において小中一貫教育を推進
- ・平成29年度 飯塚市立小中一貫校幸袋校開校

3. 小中一貫教育の取組概要

ねらい

- 義務教育9年間を「児童生徒が生涯に亘って幸せな人生を構築するために必要な資質・能力を身につけさせる期間」と捉え、キャリア教育の視点からの基礎的汎用的能力の育成を目指した9年間を貫く教育課程を作成し、自律的学習者の育成を図る。

教職員体制

- 校長：2名
- 教職員：乗り入れをする教員のみ兼務発令
- 小中一貫教育コーディネーター：教務主任が兼任し、行事や時制等を調整

教育課程特例・区切り・区切りを意識させる学校行事等

- 教育課程の特例：具体的な小中一貫教科等は設定していない
- 区切り：4 - 3 - 2
- 学校行事等：小4で「二分の一人式」、小6で「夢を語る会」、中3で「立志式（小6・中1・中2・保護者の参加のもと、自分の今後の生き方を生徒一人ひとりが語る）」を実施し、節目で将来の自己像を考えさせることで、その時点で取り組むべきことを具体化させている。また、中学校ではキャリアマングラ（夢や目標をマス目書き込むことで必要な取組を明確化させるシート、本校では「ころごシート」と命名）を1年ごとに更新し、3年間で完成させることを目指している。

教科担任制・教員の相互乗り入れ

- 教科担任制：理科（5年）、英語（5・6年）、外国語活動（3・4年）
- 教員の相互乗り入れ：中学部教員が小学部の音楽に乗り入れ授業を行うとともに、数学・理科・美術・技術家庭・保健体育において出前授業を年間を通して実施

児童生徒の異学年交流の工夫

- 「結いの日」：一ヶ月に3回、中学部生徒が小学部児童のプリントの丸付けや音読等で学習指導を実施。また、昼休みに合同で大縄飛びを行うなどして交流。
- 「小中合同委員会」：年2回小学部と中学部の全委員会が合同で挨拶運動などの取組を計画・実施。

市町村教育委員会等による支援

- 飯塚市の全中学校区において小中一貫教育を平成23年度より実施
- 年間2回の小中一貫コーディネーター研修の実施
- 令和4年度に小中一貫全国サミットを開催予定

その他

- 飯塚市ICT教育推進モデル校として、タブレットを使った教育活動の推進にも小中合同で取り組んでいる。

テーマ：小中一貫でこそ実現する自律的学習者を育成するためのPBLを中心とした「キャリア教育」

児童生徒の実態調査（文部科学省の「キャリア教育の手引き」に掲載されているキャリア教育アンケート）の結果、キャリア教育の基礎的・汎用的能力のうち、課題解決能力に課題があることがわかった。また、VUCAの時代と称される不安定、不確実、複雑、曖昧な現代社会において、生涯に亘って幸せな人生を送るためには、自律的学習者であることが重要となる。これらのことから、自ら課題を見つけ、その課題を協働で解決していくPBL（Project-based Learning）の導入が課題解決の切り札となると考え、小中一貫教育の前期段階においてPBLを行うための基礎的・汎用的能力を育成し、中期からPBLを導入した。また、PBLの導入にあたっては、飯塚市や企業等との連携を図ることで、具体的な地域の課題を扱うように配慮している。さらに、教科との横断性を高めるために、課題解決に必要な教科の知識・技能を考えさせる時間を確保したり、教科の授業でPBLの手法を用いて課題解決を図るようにした。

● 9年間を通したPBLを中心とする教育課程の創造

基礎的・汎用的能力の基礎を培う活動（前期：小1～小4）

中期からのPBLの実施に備えて、家庭で自分の仕事をもち、人のために働くことよさを実感する小1「家族にここぞ大作戦」、たくさんの人との関わりの中で自分が成長したことを知る小2「あしたへタッチ」、地域に出向き、見つけた地元幸袋の素晴らしさについて調べ、発信する小3「伊藤伝右衛門ってどんな人」、環境や障がい者福祉などの身近な問題に目を向け、多くの人との出会いを通して自分がすべきことを考える小4「わたしたちにできること」等、人間関係形成・社会形成能力や自己理解・自己管理能力の育成を中心とした発達段階に応じた教育活動を実施している。



「わたしたちにできること」でのボランティア（小4）>

前期で身に付けた基礎的・汎用的能力を、中期のPBLに発展的に生かす

課題解決能力の基礎を培う活動（中期：小5～中1）

【ちょいボラ隊参上～学校のためにできること～（小5）】

学校生活の課題をボランティアで解決する課題としたPBL。学校生活をよりよくするための課題に気づき、解決のアイデアを考え、ボランティアを行った。

【地元企業とのコラボレーションプロジェクト（中1）】

福岡県中小企業同友会筑豊支部と飯塚市産学振興課と連携した地元企業をより良くするためのアイデアを考えるPBL。企業の代表から課題が提示され、課題に気づくための企業訪問の後、課題解決のアイデアをまとめ、企業の代表に提案した。



<下級生への昼休みの丸付けボランティア（小5）>



<企業の代表へアイデアを提案（中1）>

中期で身に付けた課題解決能力を、後期の真正の学びに生かす

実社会の課題を解決する活動（後期：中2～中3）

【コーポレートアクセス（中2）】

「日本の大企業からのミッションを解決するアイデアを考える」を課題とした、教育と探求社が開発したPBL。アンケート調査や企画会議等を通して、アイデアをブラッシュアップしながら、まとめ発表した。

【飯塚提言 ～市長からの課題～（中3）】

飯塚市長が出した「飯塚市でできるSDGsを達成するためのアイデアを考える」を課題としたPBL。飯塚市役所や様々な機関と連携しながらSDGs地方創生カードゲームや大学生とのオンラインによる探究学習などを行い、課題を解決するアイデアを考え、最後は市長に提言した。



<アンケート調査結果を分析して報告（中2）>



<SDGs地方創生カードゲーム（中3）>

● オンラインによるPBLの導入

3年前からPBLの基本的な考え方や学び方を習得する機会として、4～5時間で課題解決ができる教育と探求社が開発した「ソーシャルチェンジファースト」を導入し、中期から後期の全学年で実施している。昨年度は多くの人と協働した学びを実現するために、他校との合同チームによるPBLを計画したが、コロナ禍により中止となった。そこで、今年度はオンラインによる合同チームによるPBLを中1中2は福岡市の上智福岡中学校と、中3は福岡大学の大学生と実施した。



<Jamboardでアイデアを合同で考える（中1）> <タブレット上の大学生にアイデアを説明する（中3）>

令和3年度 生活科・総合的な学習の時間を中心とした幸袋校の3つの柱

	前期						中期			後期		
	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3	中1	中2	中3
「地域」を学ぶ	○普通遊びにチャレンジ！	○のぞき、野営づくり名人	○文庫センター！ ○お宿屋さん！	○伊藤伝右衛門ってどんな人	○幸福自慢	○幸福自慢	☆第一回 PBL ちよいボラ隊、参上！	☆第二回 PBL 地元企業とのコラボレーションプロジェクト	☆第三回 PBL コーポレートアクセス（教育と探求社）	☆第四回 PBL 飯塚提言 ～市長からの課題～		
「世界」をとおく			○地域を知ろう	○日本の文化 外国の文化	○幸福自慢	○幸福自慢	○手紙への願い！ わが幸袋校へ	○九州工業大学連携事業	○SDGsカードゲーム	○SDGsカードゲーム 地方創生	○SDGsカードゲーム 地方創生	○SDGsカードゲーム 地方創生
「未来」を創造する	○家族にここぞ大作戦	○あしたへタッチ！	○幸福自慢	○幸福自慢	○幸福自慢	○幸福自慢	○幸福自慢	○幸福自慢	○幸福自慢	○幸福自慢	○幸福自慢	○幸福自慢

※S.C.F.の項目は、PBL学習の導入教材である「Social Change First」（教育と探求社）を参照、表現したものを。

これまでの成果と課題、今後の取組

- 9年間を通した自律的学習者を育成するための生活科・総合的な学習の時間を核とする教育課程を整備できたことで、将来の生活に展望を持ち（中3での志を持った生徒95%以上）、現在の教育活動で意欲的に活動する児童生徒が確実に増えた。また、タブレットを活用した教育活動を導入したことで、今までに出会うことがなかった方との交流が増え、多様な価値観に触れる機会を増やすことができた。さらに、教育活動の幅が広がったことから教員の創意工夫の余地が増え、意欲的に挑戦する教員が増えた。
- 前期を指導する教員が9年間を見通した基礎的・汎用的能力の確実な向上をさらに意識して指導を行うことで、中期以降のPBLの充実を図る。また、中期以降のPBLにおいて、生徒同士がアイデアを批評し合う場面でお互いを高め合うやりとりを促進する観点から、批評のルールの確立を目指す。
- 今後は生活科・総合的な学習の時間のみならず、教科固有の学びを含めた教科等横断的なPBLの実施を進めていく。